

中世末期の浄土宗藤田派僧の活動

——百万遍知恩寺を中心に——

藤 本 頭 通

藤田派は然阿良忠門下六派の一派で、唱阿性真（性心）を派祖とし、土塔派・水沼義とも言われ、寂慧の白旗派・尊観の名越派とともに関東三派と称されている。

性真は良忠の鎌倉入府に従い、『決答授手印疑問鈔』をも筆録するなど同門下における高弟であったが、良忠寂後の正応元年（一二八八）下総国猿島郡中根に高声寺を創建し、この地に教線を求めて行く。さらに藤田派が猿島郡周辺の北総地方に確固たる教線域を得たのは、性真の弟子で高声寺第二世となった持阿良心によってである。良心は猿島郡伏木に専修寺、同郡内門に大翁寺、同郡西泉田に西光寺、葛飾郡小福田に無量寿寺を創建した。一方、『論註記見聞』『決疑鈔見聞』『伝通記授決鈔』『東宗要見聞』『授手印授決鈔』などの著述も多く、藤田派の教学も良心によって体系づけられたものと考えられる。その後、この法系は持阿―持名―唱名―良薫―良岌―岌伝―岌光―岌善―岌応―岌弁―呑竜と近世初頭

まで次第される。また教線域は、室町初期の唱名門下の善忠・教蔵が三河国渥美郡吉田に悟真寺を創建・経営し、感誓は越後新善光寺に入寺、三河・越後地方に拡張した。さらに天文年間に至って、岌翁―岌長―岌善―岌州―岌興と五代にわたる百万遍知恩寺住持を輩出するまでになる。

しかし、浄土宗が白旗派によって近世的教団へと統一される過程において、同派は一派教団として全く存在しないものとなった。同派同様に、名越派は白旗派中心の本末制度に組み込まれつつも近代まで伝法権を保持し続けたのに対し、何故、藤田派はその本末圏も伝法権も保持し得なかったのだろうか。知恩寺へ五代にわたって、その法系が入寺した天文年間にその最大の教線をほこったと思われるが、この時期の藤田派僧の活動、特に百万遍知恩寺に入寺した僧の活動を追いつつ、同派が一派教団として近世にまで存在し得なかった要因を考察してみたい。

さて、炭翁は天文十二年（一五四三）六月に越後糸魚川善導寺より、知恩寺第二十七世住持職に就いた。続いて炭翁は越後高田善導寺から、炭翁は越前西方寺よりそれぞれ知恩寺へ入院している。また炭翁は炭翁の弟子であり、炭翁は会津高蔵寺の法系である。炭翁・炭翁・炭翁・炭翁・炭翁は知恩寺へ入院した天文から天正年間にかけて藤田派の中心的勢力圏は、その入院経路から見て北陸・奥州地方と考えられる。

まず、越後・奥州地方に進出したのは、唱名門下の感誓とその法系である。感誓は越後松木谷に新善光寺を再興、その五代の法弟炭翁に至って、同寺は同国蒲原郡津川に移建された。炭翁以後同寺に入寺したのは、藤田派第七世炭翁の弟子炭天である。永正年間ごろ炭翁は下総葛飾郡小福田無量寿寺より会津地方へ教線を求め、炭天ははじめ新善光寺に入寺したが、会津領主芦名盛高の依頼によってこの地に高蔵寺を創建した。大永二年（一五二二）盛高の子、盛舜が高蔵寺を盛高の菩提所としたことから檀越関係が生じ、大永から天正年間に炭天の法系、等月―等天―学天―炭庵と次第する中で、芦名氏の領国会津・河沼両郡に勢力を扶植する契機となった。『蓮門精舎旧詞』には、炭西の創建した会津郡若松大安寺、炭峰の再興した河沼郡坂下光明寺、炭廓の創建した貴徳寺、等天の弟子徳翁の創建した大沼郡蕎麦目迎接寺、知恩寺三十世炭州の師炭円の再興した河沼郡青木正徳寺など高蔵寺

門末三十二ヶ寺が見られる。また、高蔵寺の歴住が入寺した新善光寺門末も、炭州の創建した越後蒲原郡五泉安勝寺など十四ヶ寺を数える。当時、藤田派が芦名氏領国及び隣接する上杉氏領国に如何に勢力を伸張したかを示すものである。

すでに述べたように、天文十二年六月突如として炭翁が、後奈良天皇の勅命をもって知恩寺へ入院する。当時、藤田派が北陸・奥州を中心に門末を形成、伸張していたといえ、関東・東海・京畿を勢力下に置き、知恩院を中心に浄土宗統一をはかる白旗派には比べようのない勢力である。さらに知恩寺は炭翁の入院まで一条派・三条派・木幡派・白旗派の法系によって占められて来た。それが、藤田派法系の入院という異例の事態を生んだ要因は何であったのだろうか。まず、そこで考えられることは、大永から天文年間にかかる知恩院と知恩寺の本末争いである。

知恩院と知恩寺の本末争いは、大永三年（一五二三）四月將軍足利義晴の公状で知恩寺を浄土宗の本寺とし、知恩院をその別院とする旨を示されたことに起源すると言う。知恩院側にとって、この主旨は到底受入れられるものではなく、これを撤回させようと青蓮院尊鎮を以て朝廷・幕府に訴える。しかし、其意を入れられなかった尊鎮は高野山に逐電してしまふ。これより前、同年閏三月に知恩寺伝譽に対し、一宗々侶の出世執奏権が与えられている。この知恩寺に対する出世

執奏の永宣旨を破毀することで尊鎮は帰洛し、事は一旦治まる。だが、天文十九年（一五五〇）足利義晴の葬儀の諷経座次をめぐって再び争い、幕府は知恩寺の上座を定めた。

この争いは、室町初期より朝廷・幕府の厚遇を受け抬頭した知恩寺と、青蓮院を背景に教団統一をはかろうとする知恩院との本末・一宗々侶の出世執奏権をめぐるのであったが、室町中期以降、飛躍的に地方本寺との本末関係を形成する知恩院に対し、知恩寺もまた地方勢力を支配下に置き、これに対抗しようとしたものである。北陸・奥州に勢力を伸張する藤田派の存在は知恩寺の意図に合致するものであり、藤田派は京都進出をはかることで白旗派に対抗しようとしたと考えられる。この知恩寺と藤田派の利害一致が、炭翁の知恩寺入院という異例の事態を生んだと思われる。

炭翁は入院後、天文十三年四月に紫衣綸旨を受け、前述したように天文十九年五月足利義晴の葬儀に際して、知恩寺の地位を知恩院の上座とする幕府の裁可を得ることをみた。続いて、同二十二年越後高田善導寺より炭翁が、炭翁同様以後奈良天皇の勅命を以て入院し、以後炭善・炭州・炭興と入院する。特にこの中において、公家・戦国大名に接近し、知恩寺を背景に藤田派の勢力拡張をはかろうとしたのは炭州である。炭州は会津領主芦名氏の一族と言われ、会津高嶺寺末の正徳寺中興炭円の子とする。越後蒲原郡安勝寺から正徳

寺を経て新善光寺に住し、さらに知恩寺に入院したと考えられるが、『新撰往生伝』等によると炭州を知恩寺二十九世とし、炭善・炭州の代数が入れ替っている。さらに炭善・炭州の入院・退山年次も明確ではない。それはいずれにしても、永禄年間初めには入院していたと思われ、永禄二年（一五五九）六月將軍義輝の懇請で上洛した上杉謙信と近江坂本で、近衛前嗣の越後下向について、前嗣とともに炭州は密談している。翌永禄三年九月前嗣は、弟聖護院道澄・炭州を同行して越後に下向した。

炭州は近衛前嗣と上杉謙信の間を取り持ち、前嗣の越後下向、謙信の上洛に助力するなど政治的に活躍する一方で、知恩寺の御影堂再興のために阿波に下向するなど門派経営に力的に活動している。炭州は知恩寺退山後、泉州堺旭蓮社に住し、晩年は旭蓮社を弟子炭安に附して摂州船場に長林寺を創建する。元禄年間の知恩寺門末に、泉州堺の長徳寺・護念寺・幸徳寺・浄光寺などが散見できるが、これらの末寺は炭州の法系が創建したとみられ、堺を中心に知恩寺を背景とする藤田派が勢力扶植をはかったと考えられる。

また、炭長とその弟子炭盛は、尾州名古屋に養蓮寺・養林寺を創建し、炭善は江州高島郡願船寺・武州埼玉郡行田大長寺を創建している。炭善はこの他に出羽庄内専念寺も創建している。その弟子炭円も同所に安養寺・浄泉寺を創建した。

以上挙げた寺はいずれも近世にはいっても知恩寺末寺とするものである。炭州のみならず、藤田派法系五代の住持が勢力的に廻国弘通をはかった一端が窺える。

しかしながら、近世における知恩寺門末には、藤田派が京畿に進出する原動力となった会津高巖寺・蒲原新善光寺門末は見られない。つまり、藤田派が知恩寺住持職を占めたのにもかかわらず、従来の知恩寺門末へ新に自派の地方門末を組み込むことができなかったのである。室町中期以降、奥州を中心にその勢力を拡張したとはいえ、藤田派の教団は白旗派ほど近世的教団の性格をこの時点においてもまだ持ち得なかったのである。加えて、永禄三年（一五六〇）九月に將軍義輝は知恩院を浄土宗の本寺とする旨の御教書を発し、そして天正三年九月には浄土宗々侶の香衣執奏権が知恩院に与えられたことで、知恩寺と知恩院の立場が逆転した点も藤田派による知恩寺門末形成が成し得なかった要因と考えられる。天正年間以降、知恩院は浄土宗々侶の出世執奏権を独占、他派門末を吸収して行くことになる。同時に藤田派の地方勢力も知恩院に吸収され、白旗派への転派をよぎなくされていたと考えられる。

以上、中世末期における藤田派僧の活動を百万遍知恩寺と同派との関係を通じて概観したが、浄土宗の近世的教団へと発展する上に同派の消滅は必然性を帯びたものであった。同

派は奥州北陸に勢力を扶植し、芦名・上杉氏などの関係を密にして知恩寺へ進出した。しかし、知恩院と知恩寺の本末争いが同派の知恩寺への進出の契機となった反面、究極的には同派消滅の要因となったと考えられる。また、同派自体がその勢力圏において、確固たる本末関係を形成し得なかった点にもその要因を求めることができる。つまり、白旗派に比べ同派教団が後進的で、近世的な教団に変質できなかったと言える。

- 1 『大日本仏教全書』史伝部七巻所収「長徳山知恩寺歴志略」。
- 2 『増上寺史料集』第六巻五六頁。
- 3 『増上寺史料集』第六巻七一頁、七一三頁、七二〇頁、『浄土宗全書』一七巻所収『新撰往生伝』巻三。
- 4 『増上寺史料集』第六巻六七八頁、六八〇頁。
- 5 注3と同。
- 6 注3と同。
- 7 『浄土伝灯総系譜』『増上寺史料集』第六巻六八〇頁。
- 8 水野恭一郎・中井真孝編『京都浄土宗寺院文書』所収「知恩院文書」
- 9 藤本了泰「足利時代浄土宗教団の発展と青蓮院との関係の一考察」鴨台史報二参照
- 10 注9と同。
- 11 注1と同。
- 12 注9と同。
- 13 注8と同。
- 14 注8と同。
- 15 『増上寺史料集』第六巻六八三頁。
- 16 『上杉年譜』永禄二年六月二日条、『同』同三年九月。
- 17 伊藤祐晃著『浄土宗史の研究』参照。
- 18 『増上寺史料集』第五巻一二六頁、一六七頁。
- 19 『同』第六巻六一九頁。
- 20 注9と同。

（知恩院史料編纂所編纂助手）